

新潟県巻町

菖蒲塚古墳・隼人塚古墳

— 2002年確認調査の概要 —



2003年

巻町教育委員会

序 文

巻町は数多くの遺跡が分布するところとして知られていますが、中でも国指定史跡の菖蒲塚古墳は多くの人々に強い関心をもたれている遺跡といえるでしょう。

菖蒲塚古墳の横の平坦部は以前、町の小学校の運動会や消防演習場として利用されていました。また、古くから町内の幼稚園や小学校では遠足や社会科の授業として菖蒲塚古墳へ足を運ぶ機会も設けられています。そのため子供からお年寄りまで、町民にとっては思い出深い場所のひとつといえるかと思えます。これらのことは、現地説明会での多くの参加者や、調査中に町内外から多くの見学依頼があったことなどからもうかがえます。

菖蒲塚古墳は日本海側の前方後円墳の分布としては最北に位置しており、当時の歴史を考える上で大変重要な位置を占めているといえます。今回初めて正式な調査が行われ、古墳の規模や周囲に溝の巡ることなどが判明し、古墳に対する新たな知見が得られたことは大変意義深いことでもあります。今回の調査を契機に町のひとつのシンボルともいえる菖蒲塚古墳が今後さらに保存・整備され、町民・国民の財産として有意義に活用されていくことを期待しております。

また確認調査では多くの方々から多大なるご支援を賜りました。実施にあたりご理解いただいた土地所有者ならびに檀家の皆様、現地調査に携わった方々、調査や報告書作成の間に様々なご指導・ご教示を頂いた方々に対し、深甚なる謝意を表します。

平成15年3月31日

巻町教育委員会

教育長 植 村 敏

例 言

- 1 本書は、平成14年度に実施した菖蒲塚古墳・隼人塚古墳における確認調査の概要報告書である。
- 2 今回の調査は、国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」の一環として実施した。調査に係る総事業費は1,658,461円で、国費50%・県費25%の補助を受けた。
- 3 調査は、遺跡の保存・整備を視野に入れたもので、範囲ならびに性格究明を目的とした。
- 4 調査体制は以下のとおり。
調査主体：植村 敏（巻町教育委員会教育長）
調査担当：相田泰臣（巻町教育委員会社会教育課主事）
調査員：前山精明（巻町教育委員会学芸員）
調査補助員：小池勝典（新潟大学大学院生）・武部美恵子・長澤光穂・矢木秀典（以上新潟大学学生）
事務局：大久保恵美子（巻町教育委員会社会教育課課長）・長谷川斉（同課課長補佐）
- 4 現場作業は下記の方々に協力を頂いた。
阿倍ユキ・有坂アヤ・大沢キチ・玉木ウメ・寺沢タマ・中山キミ・原田キミ・堀内トミ・堀之内キミ・山賀ハツ・山賀正信・山本山一（以上竹野町）・大澤廣嗣（前田）・古沢シヅエ（鷺ノ木）
- 5 記録作業から整理作業に至るまで、朝平陽子・阿部かおり・設楽ちづる・本間慶子・山本美代子の各氏から助力を得た。
- 6 本書の編集は相田泰臣・前山精明が担当した。執筆分担は、IV遺物の石器・縄文土器が前山精明、それ以外が相田泰臣である。
- 7 実測図版の作成は執筆分担に対応する。
- 8 表紙・裏表紙・PL.1掲載の空中写真は、株式会社サープラックスに撮影委託したものである。
- 9 出土資料及び記録類は巻町教育委員会が一括保管している。
- 10 文化庁記念物課・新潟県教育庁文化行政課からは、調査に関して多くの指導を頂いた。
- 11 調査から本書作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示を賜った。ここに厚くお礼申し上げる次第である。（敬称略・五十音順）
甘粕 健・小池 勝典・高浜 信幸・田海 義正・榎宜田 佳男・橋本 博文・丸山 一昭・渡辺 武文
- 12 調査に際し、阿部秋雄氏（竹野町区長）・有坂 洋氏・佐藤博康氏（以上角田山麓の遺跡を考える会）から援助を賜った。
- 13 調査では地権者である陸貴一氏・陸初瀬氏より格別なご理解・ご協力を頂いた。

凡 例

- 1 セクション図の縮尺は1/80に、遺物の縮尺は1/3に全て統一した。
- 2 平面図の方位は全て磁北をさす。
- 3 土層の注記は、I 表土、II 流土、III 盛土、IV 旧表土に大別し、その中を算用数字で細分した。また、アルファベットのCは攪乱を、Sは石（墓石を含む）を示している。
- 4 セクション図の図面におけるスクリーントーンは以下のとおりである。

 盛土  旧表土  石

なお地山は、標高10cmごとに横の直線で示した。

I 遺跡概観

1. 古墳の立地

新潟平野の西縁には、北から角田山（481m）・多宝山（633m）・弥彦山（644m）・国上山（313m）の4主峰からなる「弥彦・角田山塊」が、南北24km、東西4kmあまりの広がりをもって日本海に沿うように連なる。菖蒲塚古墳はこの角田山東麓に位置している。角田山東麓は、海拔30m足らずの低台地が南北4km・東西1.5kmにわたり広がりを見せるが、菖蒲塚古墳は中でも南北では中ほど、東西では東端の標高約26mの舌状台地先端部に位置している。

菖蒲塚古墳・隼人塚古墳は東西に走る尾根の東端の台地に位置しており、菖蒲塚古墳は主軸を尾根の走行方向と交差する南北にとっている。古墳の周囲は以前運動場として利用されていたことから分かるように、場所によって広さは異なるものの平坦な面が形成されている。この平坦面の南北にはいずれも東西方向で平野部まで落ち込む急な崖面が存在するが、南側では前方部西側までこの崖面が入り込む。また隼人塚古墳及び後円部西側では、高低約2mの急な斜面が南北に走り、傾斜が終わると再び平坦域をもち、その後緩やかな傾斜が北西の尾根上に下っていく。東側は、後円部側では緩やかな傾斜が尾根上に下るが、前方部側では高低約3mの急斜面が南北に走り、その後後円部側と同じ傾斜がのびる。このように現状では、南北に崖面、東西に急斜面を有し、それらに挟まれた台地の平坦部に両古墳が立地しているといえる。

2. 周辺の遺跡分布（第1図）

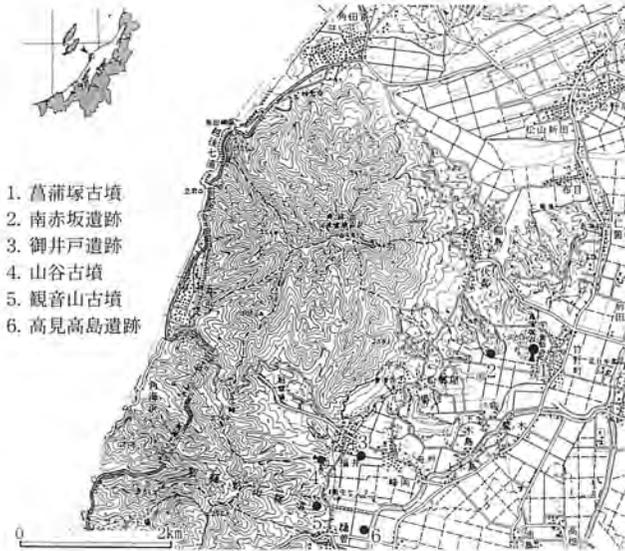
新潟平野の古墳は、古墳時代前期に県内で数・規模ともに他地域を圧倒しており、菖蒲塚古墳の位置する弥彦・角田山麓は信濃川左岸における中核的な地域であったと考えられている。同じ尾根上の同時期の遺跡としては、古墳の北西約140mに位置し、緑色凝灰岩の管玉製作関連資料約150点が採集された越王遺跡や、同約600mの低台地に位置し、住居址やテラス状遺構とともに土師器や北方系遺物、折衷土器等が出土した南赤坂遺跡がある。南西方向では2.5kmの沖積地に大量の土師器やヒノキ製の梯子等を出土した御井戸B遺跡が、同3kmの山地上に墳長37mの前方後方墳である山谷古墳が、同3.5kmの山地上に葺石を持ち径約26mの円墳と考えられる観音山古墳がそれぞれ位置する。また南へ約6km離れた井田丘陵には、測量調査で墳長約26.3mの前方後円墳と考えられている稲場塚古墳が存在する。

古墳と集落の関係については、山谷古墳にはその麓に位置する御井戸B遺跡が被葬者の生前の拠点集落として対応する可能性が高い。他は不明な点が多いものの、観音山古墳には高見高島遺跡が、稲場塚古墳には蒲田遺跡がそれぞれ対応すると推測される。これらの集落はいずれも沖積地内の微高地上に営まれていたと考えられる。

しかし、菖蒲塚古墳の近辺にある南赤坂遺跡では、確認された住居跡は2軒と少なく、出土土器の量や地形などからは小規模の集落であったと考えられる。菖蒲塚古墳の被葬者との関わりはあったとしても、生前の拠点集落とはみなし難い。御井戸B遺跡では山谷古墳造営後も依然として一大拠点集落が形成されていることから、菖蒲塚古墳の被葬者の活動拠点が御井戸B遺跡であった可能性も無いわけではないが、距離的にかなり離れる。近年の新潟平野の研究成果などからは、菖蒲塚古墳の位置する台地下の平野部に拠点集落が埋没している可能性も考えられる。

3. 菖蒲塚古墳のこれまで

菖蒲塚古墳に関連した主な調査や文献などを時代順に3期に分けて概観する。主に第1期は古器物への好古趣味的な関心が主流の時期、第2期は町内在住の上原甲子郎により本格的な研究が行われ始める時期、第3期は新潟大学考古学研究室の設立や埋蔵文化財行政の整備を契機として調査・研究が活発化する時期である。



1. 菫蒲塚古墳
2. 南赤坂遺跡
3. 御井戸遺跡
4. 山谷古墳
5. 観音山古墳
6. 高見高島遺跡

角田山麓の主要遺跡分布

1. 緒立八幡神社古墳・緒立遺跡
2. 菫蒲塚古墳・隼人塚古墳・越王遺跡
3. 天神遺跡
4. 穴口遺跡
5. 山谷古墳
6. 御井戸遺跡
7. 観音山古墳
8. 高見高島遺跡
9. 稲場塚古墳
10. 蒲田遺跡
11. 大久保古墳群
12. 奈良崎遺跡
13. 下小島谷古墳群



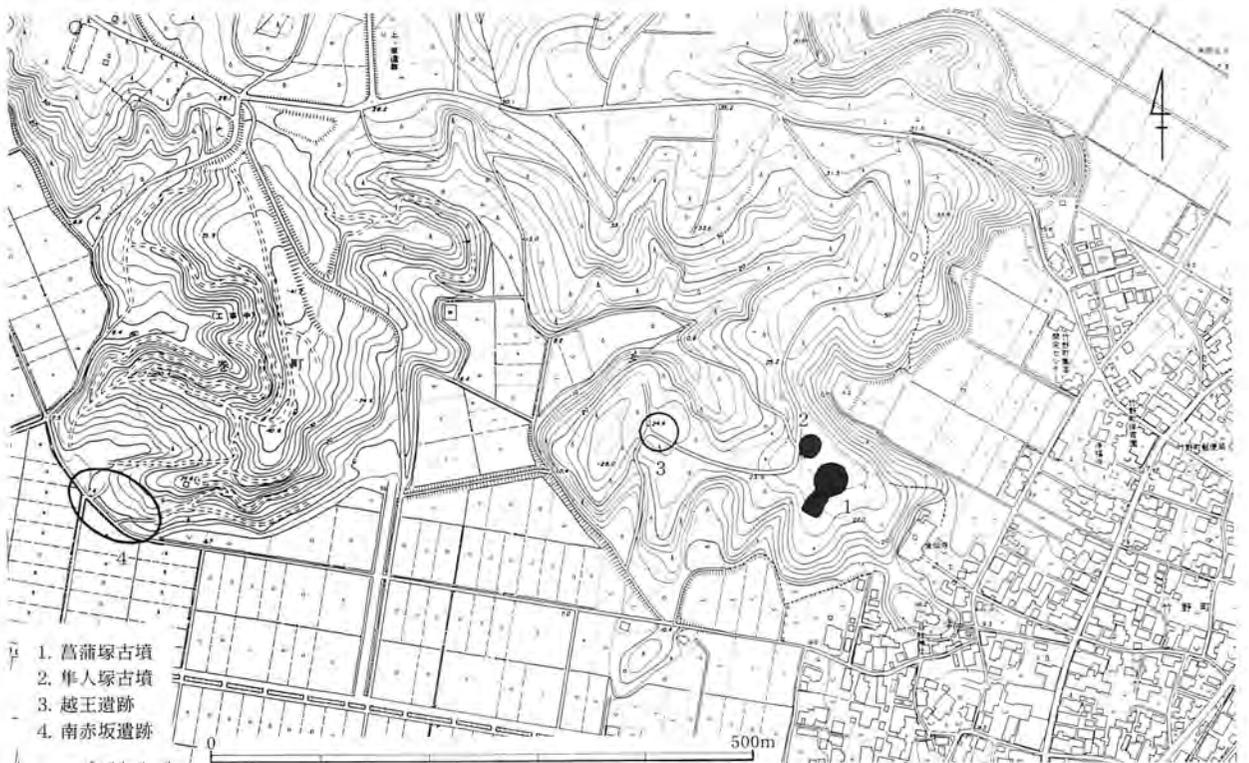
蒲原平野における古墳時代前期の主要遺跡分布



角田山麓の低台地（南東から）：菫蒲塚古墳（1）と南赤坂遺跡（2）

新潟シンポジウム 編年[1993]	6期	7期	8期	9期	10期	11期
緒立遺跡	-----					
南赤坂遺跡	-----					
御井戸遺跡	-----					
蒲田遺跡	-----					
奈良崎遺跡	-----					

信濃川左岸の主要遺跡消長
(年代は日本考古学協会[1993])



1. 菫蒲塚古墳
2. 隼人塚古墳
3. 越王遺跡
4. 南赤坂遺跡

菫蒲塚・隼人塚古墳の位置と関連主要遺跡
第1図 蒲原平野の古墳時代前期の遺跡

第1期（江戸中期～昭和10年代）

菖蒲塚古墳に関する記述の初例は、橘茂世によって文化8（1811）年に著された『北越奇談』である。これによれば、源頼政の妻の菖蒲御前とその家臣である隼人が菖蒲塚古墳と隼人塚古墳に葬られたと当時考えられていたことや、盗掘により墓から古鏡1面と小餅1つが出たが、鏡はその後市に売られ、さらに作者の友人である谷江家が買い取り保管していることなどが記されている。書中にはその鏡の図が示されており、大きさ、文様、色調なども記されている。

1844年には新発田の儒者丹羽思亭により菖蒲塚古墳から出土したとされる鏡の拓本が採られている。

1930年には『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯が発刊され、この中で斎藤秀平は、「後圓部の頂上にありし小塚」を「菖蒲の前の墓と稱して、小さき石塔を建て」て「供養し來りしために、後圓部の頂上は幾分か削り平らげられて」いること、「前方部と後圓部の接合点を横断して、前年來村民が通路として往復せし爲に、幾分か踏滅らされて、低くなりてあれども、前方後圓の型式は完全に認め得る」こと、さらに村老の話から「百年程前に、此の小山（後圓部）の上にある塚の横手に穴を明けて、其中より物を盗み取りたる」（『北越奇談』に記された盗掘と考えられる）「を見付けて、寺ではじめて騒ぎ出し、又盗れてはならぬとて、残りの物を掘り出したものが、今寺に保存」されていることなどを記している〔斎藤 1930〕。

第2期（昭和20年代～40年代）

1954年には、斎藤秀平が前述の谷江家にて鏡が秘宝として現存して伝えられていることを確認している。

1959年には巻町教育委員会により菖蒲塚古墳の測量調査が行われた。

1961年には巻町在住の考古学研究者、上原甲子郎による『菖蒲塚古墳』が刊行された〔上原 1961〕。古墳の立地や形態などから古式古墳に属することや、鏡や寺が保管する玉類といった遺物から実年代は5世紀に位置付けられる可能性などを提示している。また斎藤忠が菖蒲塚古墳に来た折に教示を受けたとして、「前方部正面及び後圓部西側の墳丘より6メートル離れたところに墳丘に沿って幾分窪んでいる処がありますが、これは或いは空漕の痕跡であるかもしれません」とも記している。

1969年には巻町教育委員会により測量調査が行われた。

1970年には柵・案内板・説明版の設置、菖蒲塚・隼人塚両古墳の墳丘補修の盛土作業などが行われ、巻町潟東村教育委員会が刊行した『史蹟菖蒲塚古墳環境整備事業経過報告』の中でその経過などが報告された。

第3期（昭和50年代）

1980年代は蒲原平野を中心とした古墳の調査が新潟大学考古学研究室を中心に活発に行われ、多くの成果が挙げられた時期である。1986年に甘粕健は、鏡・玉・墳形などから菖蒲塚古墳を山谷古墳に続く首長墓として位置付けた。そして角田・弥彦山麓の古墳について稲場塚古墳→山谷古墳→菖蒲塚古墳といった変遷案を示した〔甘粕 1986〕。

1987年には桑原正史により、菖蒲塚古墳に関する文献や経塚資料の銘文などの検討が行われ、盗掘と寺によるその後の発掘が行われた時期やそれらの規模・範囲などが考察された〔桑原 1987〕。

1989年には、保内三王山11号墳出土の玉類の考察の中で、菖蒲塚古墳の玉類が山谷古墳出土の玉類に後続することが論じられた〔荒木 1989〕。

1993年には、菖蒲塚古墳が能登の雨の宮2号墳をモデルに築造された可能性が指摘された〔甘粕・広井 1993〕。また同年の日本考古学協会シンポジウムにおいて、川村浩司は玉・鏡・墳形から従来どおり菖蒲塚古墳を山谷古墳に後続する古墳と捉え、新潟シンポジウム編年の9・10期に位置付けた〔川村 1993〕。

1994年には『巻町史』資料編の中で、菖蒲塚古墳出土とされる鏡と管玉・勾玉ならびに、経塚出土資料の実測図が提示され、それらの年代観や考察などが行われた〔巻町 1994〕。

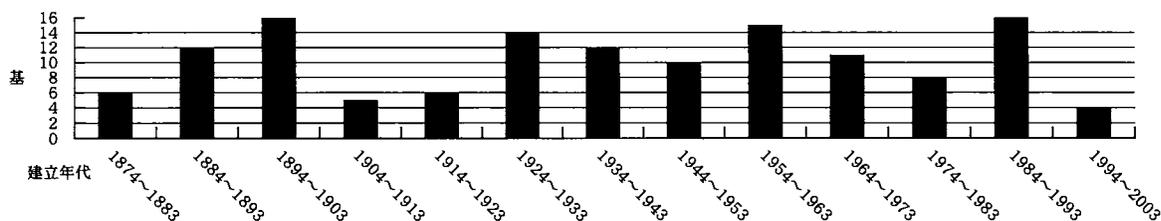
II 調査

1. 調査に至る経緯

菖蒲塚古墳は1930年に国史跡に指定された。国史跡指定範囲は、現在現地に杭等が認められずその正確な範囲は不明であるが、1930年の国史跡指定範囲を記した新潟県の図面や面積からは、おおむね両古墳の位置する平坦面全域を指定対象にしたことが分かる。

1970年には菖蒲塚古墳・隼人塚古墳の墳丘の修復および木製の柵の設置工事が国・県補助事業として行われた。柵の設置箇所の根拠は不明であるが、地元住民の記憶によれば1940年代には既にマウンドの外周に柵が巡っていたとされ、それを踏襲したものと考えられる。1983年にはその外周柵が腐朽したため、国・県の補助を受けて町が改修し現在に至っている。

このような中、一般には外周柵の範囲のみが史跡指定地であると認識され、明治以来柵の中を避ける形で周囲に墓が築かれ続けた（下グラフ・第2図）。また1995年頃には菖蒲塚古墳前方部の南に広がる平坦域の一部が墓地造成により削平されるといった事態も生じた。そこで、これまで正式な調査が行われていない古墳の規模等を明らかにし、その範囲を再度明確にすべく2003年に確認調査を行うに至った。



台地平坦部における墓標からみた墓の建立年代

2. 調査の目的と方法

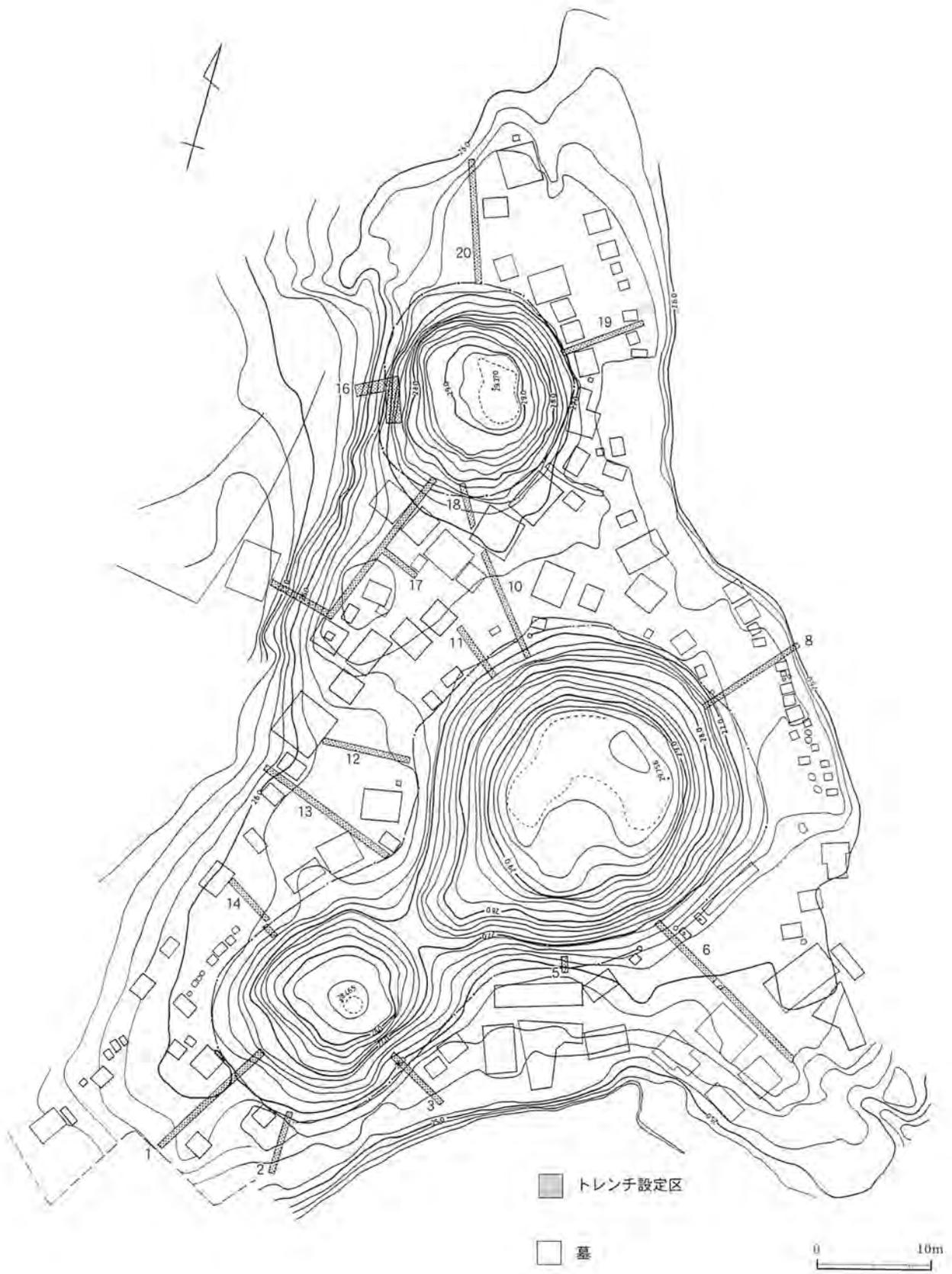
菖蒲塚古墳と隼人塚古墳の規模を明らかにすることを主な目的とし、両古墳の周囲15箇所に幅50cmのトレンチを設定した。また隼人塚古墳の西側は、1970年の整備以前には崩落面が南北に連なり、断面が剥き出しの状態であったことが知られていた。そのため整備の際の修復土を剥がし、整備以前の状態を確認すべく、南北4m、東西約1.3mのトレンチに加え、その北端に1.0mの幅で東西4.0mのトレンチを合わせたL字状の調査区（16トレンチ）を設定した。トレンチの配置・名称は第2図のとおりである。

3. 調査経過

調査前に甘粕健と橋本博文両氏から調査に向けた指導を頂いた。なお両氏からは調査中に数度現地にご来訪頂き多くの指導・教示を賜った。

8月27日から29日にかけては、事前準備としてトレンチの設定及び杭打ち、草刈り、周囲の墓の平面図作成などを行った。

9月2日に機材を搬入し、調査に着手した。9月26日には文化庁・県教育委員会の現地視察があり、進捗状況を報告するとともに、調査に関する適切な助言を頂いた。9月28日には現地説明会を開き、町内外から約130名の参加者を得た。9月中で掘削作業はほぼ終わったが、その後、天候不順などもあり、残りの掘削作業及び図面作成作業、写真撮影作業があまり進まない状態が続く。10月11日には県教育委員会の現地視察があり、様々な指導・協力を頂いた。11月に入っても天候は不良であったが、11月7日で掘削・図化・壁面等の写真撮影作業などを全て終了した。11月16日には土地所有者への現地説明を行った。11月19日には空中写真撮影を終え、11月22・23日で埋め戻しを完了した。



第2図 トレンチ配置図

Ⅲ トレンチの層序と遺構

1 トレンチ (第3図)

菖蒲塚古墳の長軸の範囲を確認するため、長軸ラインで前方部の南側に設けた全長12.7m・幅0.5mのトレンチである。

墳丘裾とした周溝内側下端は、トレンチ北端から約0.7mのところ、標高25.74mで確認された。墳丘裾から外側へは最大0.2mほどの標高差でほぼ平坦に地山が認められた。トレンチ北端から約4.7mのところ、地山が上方へ上がる場所があり、そこを周溝外側の下端と考えた。墳丘面は地山・旧表土を削り出しており、その上に2層の盛土が認められた。旧表土下場の標高は約25.8mで確認できる。また周溝のすぐ外側では、地山の上に赤味を帯びた盛土と考えられる層が1.2mの範囲で確認された。

2 トレンチ (第3図)

菖蒲塚古墳の前方部隅の範囲・形状を確認するため、前方部南東側に設定した全長5.5m・幅0.5mのトレンチである。

墳丘裾、周溝の立ち上がりは確認できなかった。全体的に土層の乱れが激しく、トレンチ中央の東壁寄りの場所では犬の骨がまとまって出土した。

3 トレンチ (第3図)

菖蒲塚古墳の前方部の範囲を確認するため、主軸に直交するラインで前方部東側に設定した全長6.0m・幅0.5mのトレンチである。

墳丘裾、周溝の立ち上がりは確認できなかった。またトレンチ東端から約1.2m～3.4mの範囲で垂直気味な落ち込みが認められ、落ち込み内には攪乱層が堆積していた。昭和初期まで菖蒲塚古墳の周囲では土葬が行われていたことが知られており、この落ち込みも近現代の墓壇であると判断される。周溝立ち上がりは確認できなかったものの、その落ち込みを挟んで東と西とは土層が異なっていた。東側では盛土と考えられる層が認められたため、落ち込みによる攪乱内に周溝外側下端が位置したものと考えられる。

5 トレンチ (第3図)

菖蒲塚古墳後円部の範囲を確認するため、後円部南東側に設定した全長1.3m・幅0.5mのトレンチである。

墳丘裾の細かな地点は攪乱により明確ではないが、墳丘側から傾斜してくる地山が平坦になるトレンチ東端から0.4～0.6mの間と判断される。なお中央の攪乱内からは焼けた骨が出土しており、中・近世の火葬墓と推測される。

6 トレンチ (第3図)

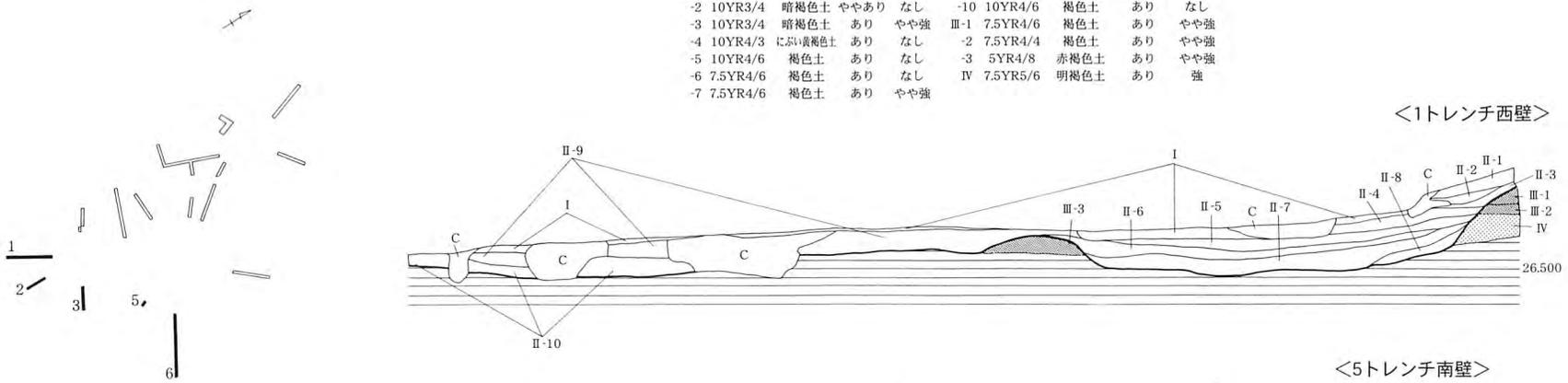
菖蒲塚古墳の後円部の範囲を確認するため、主軸に直行するラインで後円部東側に設けた全長16.9m・幅0.5mのトレンチである。内、途中木の根のため1.0m×0.5mの範囲を掘り残した。

墳丘裾、周溝内側下端はトレンチ東端から約1.0m、標高約25.7mの地点と考えた。地山はトレンチ北端から約0.7mの地点で平坦に移行するが、その外側約0.3mの範囲で盛土が認められたため、その盛土までを墳丘裾と理解した。

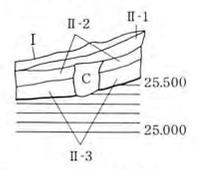
墳丘裾から外側は最大0.2mほどの標高差でほぼ平坦に地山面がのびる。周溝外側下端は、トレンチ東端から約9.8mの地点でなだらかながら地山の傾斜する場所と判断した。周溝外側の上部は旧表土と考えたが、攪乱等もあり明確ではない。墳丘は地山の上に旧表土、盛土層が確認でき、旧表土、地山を掘削して墳丘面を出したのち、その上に盛土を行っていることが分かる。旧表土下場は約26.0mで確認できる。

色調	粘性	しまり	色調	粘性	しまり	
I 10YR4/1	褐灰色土	あり	なし	II-8 7.5YR4/4	褐色土	あり
II-1 10YR4/6	褐色土	あり	なし	-9 7.5YR5/6	明褐色土	ややあり
-2 10YR3/4	暗褐色土	ややあり	なし	-10 10YR4/6	褐色土	あり
-3 10YR3/4	暗褐色土	あり	やや強	III-1 7.5YR4/6	褐色土	あり
-4 10YR4/3	にぶい黄褐色土	あり	なし	-2 7.5YR4/4	褐色土	あり
-5 10YR4/6	褐色土	あり	なし	-3 5YR4/8	赤褐色土	あり
-6 7.5YR4/6	褐色土	あり	なし	IV 7.5YR5/6	明褐色土	あり
-7 7.5YR4/6	褐色土	あり	やや強			

<1トレンチ西壁>

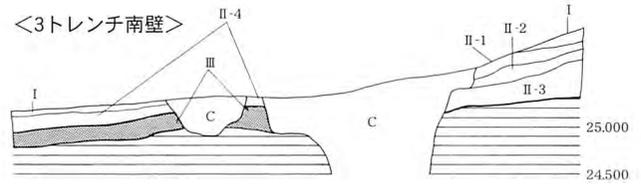


<5トレンチ南壁>



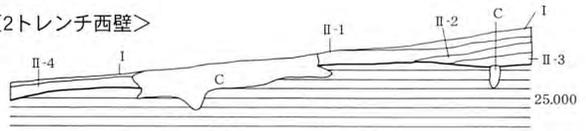
色調	粘性	しまり	備考
I 7.5YR3/1	黒褐色土	なし	なし
II-1 10YR4/6	褐色土	あり	なし
-2 10YR4/6	褐色土	あり	炭化物を微量に含む
-3 10YR5/6	黄褐色土	あり	炭化物を微量に含む

<3トレンチ南壁>



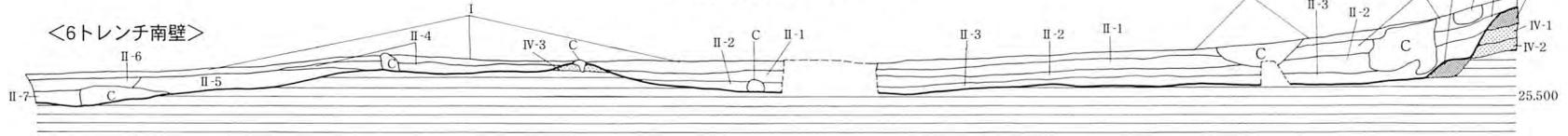
色調	粘性	しまり	備考
I 7.5YR4/4	褐色土	なし	ロームブロックを全体的に含む
II-1 10YR4/4	褐色土	あり	やや強
-2 10YR3/4	暗褐色土	ややあり	なし
-3 7.5YR4/4	褐色土	あり	やや強
-4 10YR4/4	褐色土	あり	炭化物を微量に含む
III 7.5YR5/6	明褐色土	あり	強

<2トレンチ西壁>

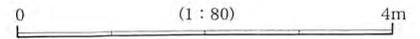


色調	粘性	しまり
I 7.5YR4/1	褐灰色土	なし
II-1 10YR4/6	褐色土	ややあり
-2 7.5YR4/4	褐色土	あり
-3 10YR4/6	褐色土	あり
-4 7.5YR4/6	褐色土	あり

<6トレンチ南壁>



色調	粘性	しまり	備考	色調	粘性	しまり	備考
I 7.5YR3/2	黒褐色土	なし	やや強	III-1 10YR4/6	褐色土	あり	やや強
II-1 7.5YR5/6	明褐色土	あり	やや強	-2 7.5YR5/6	明褐色土	ややあり	強
-2 10YR5/6	黄褐色土	あり	なし	IV-1 7.5YR5/8	明褐色土	あり	なし
-3 10YR4/6	褐色土	ややあり	なし	-2 7.5YR5/6	明褐色土	あり	炭化物を微量に含む
-4 7.5YR5/6	明褐色土	あり	やや強	-3 7.5YR5/6	明褐色土	あり	やや強
-5 10YR5/6	黄褐色土	ややあり	やや強				
-6 10YR4/4	褐色土	あり	なし				
-7 10YR5/6	黄褐色土	あり	なし				



第3図 トレンチセクション図-1

8 トレンチ (第4図)

菖蒲塚古墳の長軸の範囲を確認するため、長軸ラインで後円部の北側に設けた全長9.9m・幅0.5mのトレンチである。東壁と西壁でセクションが異なるため両者を図示した。

東壁では、トレンチ南端から約1.2mの地点で墳丘側からの地山の傾斜が一旦終りほぼ平坦な面となる。しかし、そこから約1.2m外側、トレンチ南端から約2.4mの地点でほぼ垂直に落ち込み再び平坦な地山面を形成することからここを墳丘裾と判断した。墳丘裾の標高は約26.3m。さらに外側に最大0.16mの標高差でほぼ平坦な面が約2mのびるが、トレンチ南端から約4.4mの地点で0.25mほど浅く落ち込み、その後周溝が立ち上がる。この浅い溝は東壁から約0.35m西側で途絶える(第7図)。周溝外側上端は後世の掘削により不明であるが、現状ではトレンチ南端から約6.0mの位置で確認され、約0.5m外側にのびたのち自然傾斜へと至る。墳丘面は旧表土・地山を削り出しており、旧表土下場は標高約27.0mで確認できる。

西壁では、トレンチ南端から約1.0mの地点、標高約26.7mで墳丘側からの地山の傾斜が緩まり、なだらかに下降してゆく。トレンチ南端から約4.0mで東壁の地山平坦面と近い標高となるが、全体的に西壁の地山が東壁に比べ高いレベルで確認できる。ちなみに東壁で墳丘裾としたトレンチ南端から約2.4mの地点では、西壁の地山は標高約26.4mと東壁に比べ約0.1m高く、また周溝部でも高低差はあるものの全体的に約0.1m西壁の方が高い。

面的に確認することはできなかったが、以上のことからトレンチ内の西側で周溝が途切れ、陸橋が存在していたと考えられる。また、周溝中の浅い掘り込みはこの周溝の途切れに対応する可能性が推測される。

10 トレンチ (第4図)

菖蒲塚古墳の後円部範囲ならびに菖蒲塚古墳と隼人塚古墳の関係を確認するため、後円部西側に設けた全長10.2m・幅0.5mのトレンチである。

墳丘は傾斜する地山が平坦になる地点、トレンチ東端から約2.3m、標高約26.2mの場所と考えられる。周溝底面は、最大0.08m程度の標高差でほぼ平坦な面が約6.3m続き、トレンチ東端から8.6mほどの地点で周溝外側下端となる。周溝外側上端は削平されており不明であるが、地山の上には盛土が認められる。

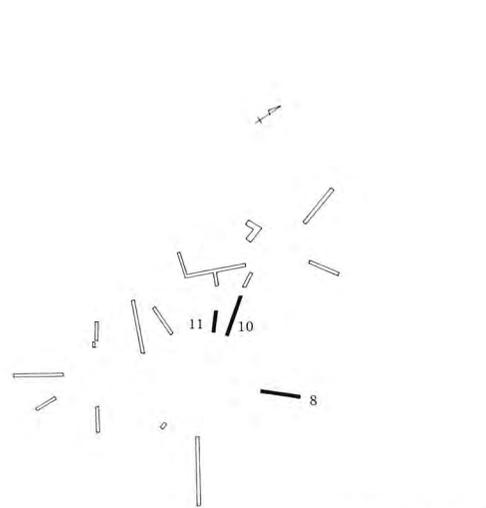
墳丘面は、地山・旧表土を削り出したのちその上に盛土を行っている。旧表土の下場は標高約26.9mで確認される。また、旧表土が認められるのはトレンチ東端から0.4mの所までで、それより外側は平坦な地山面が約0.6m続いたのち墳丘裾へと傾斜することから、東端より0.4mから1.0mの間で狭いながらもテラスを形成すると考えられる。

11 トレンチ (第4図)

菖蒲塚古墳の後円部の範囲を確認するため、主軸に直行するラインで後円部西側に設けた全長5.5m・幅0.5mのトレンチである。

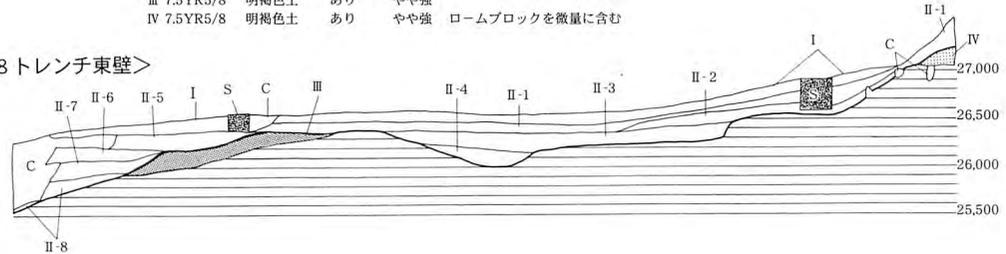
墳丘は傾斜する地山が平坦になる地点、トレンチ東端から約2.3m、標高約26.2mの場所と考えられる。周溝外側下端は調査区内では認められなかった。周溝底面は最大0.1m程度の標高差でほぼ平坦に形成されている。トレンチの中央やや西よりの地点では、幅約1.6mの掘り込みによる攪乱が認められ、攪乱底面からは近代の焼き物が見つかった。また、この攪乱中には高低差0.2mほどの炭化物層が東西約0.7mの範囲で認められた。

墳丘面は、地山・旧表土を削り出したのちその上に盛土を行っている。旧表土の下場は26.9mである。また、旧表土が認められるのはトレンチ東端から約0.6mの地点までで、それより外側は平坦な地山面が約0.9m続いたのち墳丘裾へと傾斜する。以上のことから、東端より0.6mから1.5mの間でテラス面を形成すると考えられる。



色調	粘性	しまり	備考
I 10YR2/2	黒褐色土	なし	強
II-1 10YR4/4	褐色土	あり	なし
-2 10YR5/6	黄褐色土	ややあり	なし
-3 7.5YR5/8	明褐色土	ややあり	やや強 炭化物を微量に含む
-4 7.5YR5/8	明褐色土	ややあり	やや強
-5 7.5YR4/4	褐色土	ややあり	やや強 炭化物を微量に含む
-6 7.5YR5/6	明褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む
-7 7.5YR5/6	明褐色土	あり	強 炭化物を微量に含む
-8 7.5YR5/6	明褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む
III 7.5YR5/8	明褐色土	あり	やや強
IV 7.5YR5/8	明褐色土	あり	やや強 ロームブロックを微量に含む

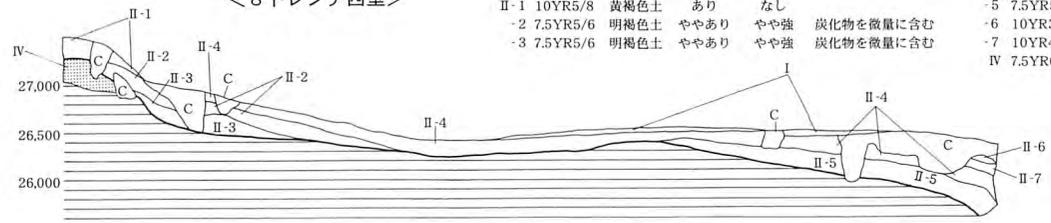
＜8トレンチ東壁＞



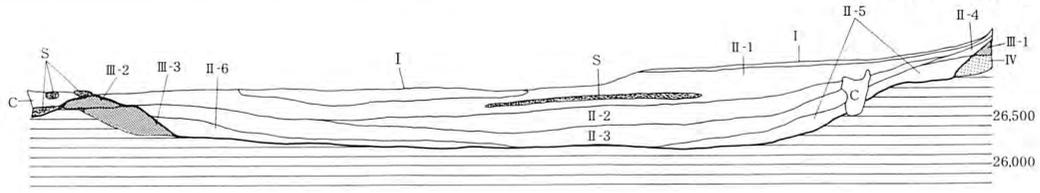
色調	粘性	しまり	備考
I 10YR2/2	黒褐色土	なし	強
II-1 10YR5/8	黄褐色土	あり	なし
-2 7.5YR5/6	明褐色土	ややあり	やや強 炭化物を微量に含む
-3 7.5YR5/6	明褐色土	ややあり	やや強 炭化物を微量に含む

色調	粘性	しまり	備考
-4 10YR4/6	褐色土	あり	なし 炭化物を微量に含む
-5 7.5YR5/6	明褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む
-6 10YR3/3	暗褐色土	あり	なし
-7 10YR4/4	褐色土	あり	なし 炭化物を微量に含む
IV 7.5YR6/8	褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む

＜8トレンチ西壁＞



＜10トレンチ北壁＞

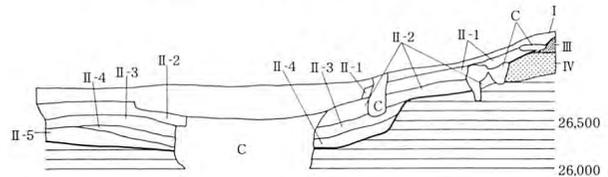


＜11トレンチ北壁＞

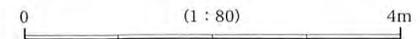
色調	粘性	しまり	備考
I 7.5YR3/2	黒褐色土	なし	なし
II-1 10YR4/6	褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む
-2 7.5YR4/4	褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む
-3 10YR5/6	黄褐色土	あり	なし 炭化物を微量に含む
-4 10YR5/8	黄褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む
-5 10YR3/4	暗褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む
III 10YR4/6	褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む
IV 7.5YR5/8	明褐色土	ややあり	やや強 炭化物を微量に含む

色調	粘性	しまり	備考
I 7.5YR4/4	褐色土	なし	なし
II-1 7.5YR4/6	褐色土	あり	やや強
-2 10YR4/6	褐色土	ややあり	やや強
-3 10YR5/6	黄褐色土	ややあり	やや強
-4 10YR4/6	褐色土	ややあり	やや強
-5 7.5YR5/6	明褐色土	あり	強 炭化物を微量に含む
-6 7.5YR4/6	褐色土	あり	やや強

色調	粘性	しまり	備考
III-1 10YR4/6	褐色土	あり	やや強 炭化物を微量に含む
-2 7.5YR4/4	褐色土	あり	やや強
-3 7.5YR5/6	明褐色土	あり	やや強
IV 5YR5/6	明赤褐色土	あり	強 炭化物を微量に含む



第4図 トレンチセクション図-2



12トレンチ（第5図）

菖蒲塚古墳後円部の範囲を確認するため、後円部南西側に設定した全長7.7m・幅0.5mのトレンチである。

トレンチ東端から0.2mの地点でわずかに地山が傾斜しておりここが墳丘裾となる可能性が考えられるが明確ではない。地山は標高約25.8mから25.9mのレベル差でほぼ水平になっている。また周溝外側下端は確認できなかった。しかし、攪乱により不明な点が多いものの、攪乱後の層は攪乱前の層とは異なっており、色調などから盛土と判断した。その場合、トレンチ東端より4.4～7.0mの攪乱中にこの盛土による高まりの傾斜下端が位置することになる。4.4～7.0mと幅があるものの、このいずれとしても張り出すようなびつな周溝の形状となる。

13トレンチ（第5図）

菖蒲塚古墳の括れ部を確認するため、菖蒲塚古墳の西側に設定した全長13.1m・幅0.5mのトレンチである。

墳丘裾はトレンチ東端から約0.7mの位置、標高約25.8mで認められた。周溝は最大0.06mほどの標高差でほぼ平坦な面が約8.9m広がり、東端から約9.6mの位置で周溝外側下端を確認できた。周溝外側上端面は墓の築造に伴う掘り込みにより不明である。墳丘面は旧表土・地山を削り出したのちその上に盛土を行っている。旧表土下場は標高約26.0mのレベルである。

トレンチ東端より約7mから周溝外側の立ち上がりまでの間では多くの土器片が出土した（第8図13トレンチ遺物分布図）が、その多くは壺の底部（第8図-9）である。また、周溝内の堆積土中からは古代・中世の遺物も出土している。

14トレンチ（第5図）

菖蒲塚古墳の前方形部の範囲を確認するため、主軸に直交するラインで前方部西側に設定した。当初全長4.7m・幅0.5mのトレンチを設けたが裾を確認できなかったため、墳丘側にさらに全長1.4m・幅0.5mのトレンチを追加したが、その際コンクリート柵を避けるため0.5m南側にずらして設定した。なお図示したセクション図は、後者の北壁セクションを裏セクションとして前者の南壁セクション図につなげたものである。

墳丘面はトレンチ東端から約1.1m、標高約25.9mのレベルで確認できた。周溝外側下端はトレンチ東端から約3.1mの場所で、周溝外側では旧表土面が認められる。墳丘面は旧表土・地山を削り出したのち、その上に盛土を施している。墳丘面の旧表土下場は標高約26.0mのレベルである。

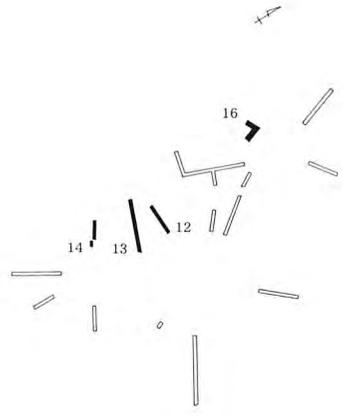
16トレンチ（第5図）

1970年の整備以前は単人塚古墳の西側（現道路側）の断面が剥き出しになっていたことが知られていた（II 2）。そのため、1970年の整備時の盛土を剥がし、整備以前の単人塚古墳西側の状態を確認するために設定したトレンチである。東西4m、南北約1.3mのトレンチに加え、さらに北側に1.0mの幅で南北4.0mのトレンチの付くL字状の調査区である。全面積は7.7㎡になる。

1970年の整備時の修復土を剥がしたところ、トレンチ東端から0.8mの地点まで墳丘断面を確認でき、北壁に向かうにつれて確認範囲が狭まることが観察された（第5図、写真PL.3）。

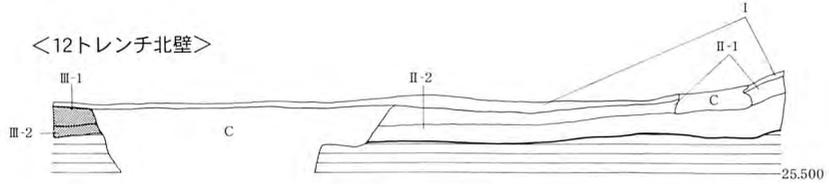
墳丘面は、地山・旧表土の上に盛土を行っている（第5図ベルト北壁）。盛土の大半は地山の土を利用しているが、一部で地山の土に挟まれるかたちで旧表土の土が堆積する状況も観察された（写真PL.3）。旧表土下場は標高約26.8m、盛土下場は標高約27.2mのレベルである。

旧表土（IV-1層）と盛土中から土器片と炭化物が認められた。このうち約18cmの厚さのある旧表土（IV-1層）の上端10cm程の高低幅の中で特に多くの土器片と炭化物が水平に分布する状況が観察され、整備以前の知見と一致することを確認できた。



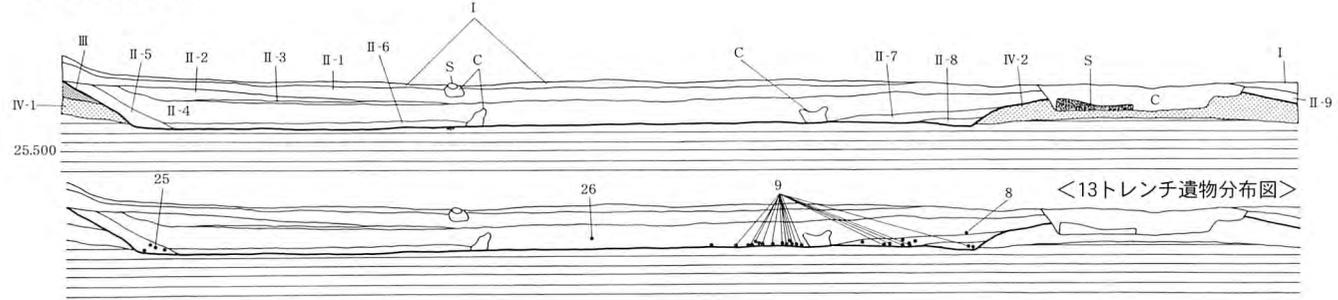
色調	粘性	しまり	備考
I 10YR4/1 褐灰色土	ややあり	やや強	
II-1 10YR4/4 褐色土	ややあり	やや強	炭化物を微量に含む
-2 10YR5/6 黄褐色土	あり	やや強	
III-1 7.5YR5/6 明褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む
-2 5YR5/8 明赤褐色土	あり	やや強	炭化物・ロームブロックを微量に含む

<12トレンチ北壁>

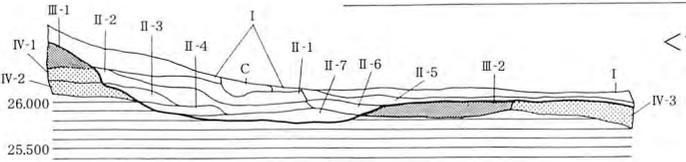


<13トレンチ南壁>

色調	粘性	しまり	備考	色調	粘性	しまり	備考
I 2.5YR3/2 黒褐色土	ややあり	なし		-6 10YR5/6 黄褐色土	あり	やや強	
II-1 7.5YR4/6 褐色土	ややあり	強		-7 10YR5/6 黄褐色土	あり	やや強	全体的に炭化物含む
-2 10YR4/6 褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む	-8 7.5YR5/6 明褐色土	あり	やや強	全体的に炭化物含む
-3 10YR4/6 褐色土	あり	やや強	全体的にロームブロック含む	-9 10YR4/6 褐色土	あり	強	全体的に炭化物含む
-4 10YR4/6 褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む	III 7.5YR5/6 明褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-5 7.5YR5/8 明褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む	IV-1 7.5YR5/8 明褐色土	あり	やや強	
				-2 7.5YR5/8 明褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む



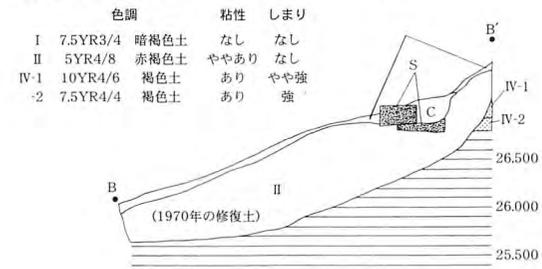
<14トレンチ南壁>



色調	粘性	しまり	備考
I 7.5YR3/2 黒褐色土	なし	なし	
II-1 10YR4/6 褐色土	あり	なし	炭化物を微量に含む
-2 7.5YR5/6 明褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-3 10YR5/6 黄褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-4 7.5YR5/8 明褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-5 10YR4/6 褐色土	あり	やや強	
-6 7.5YR4/6 褐色土	あり	強	全体的に炭化物を多量に含む
-7 7.5YR5/8 明褐色土	あり	強	全体的に炭化物含む
III-1 7.5YR5/8 明褐色土	あり	やや強	
-2 7.5YR5/8 明褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む
IV-1 7.5YR5/8 明褐色土	あり	やや強	
-2 7.5YR5/6 明褐色土	あり	強	
-3 7.5YR5/8 明褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む

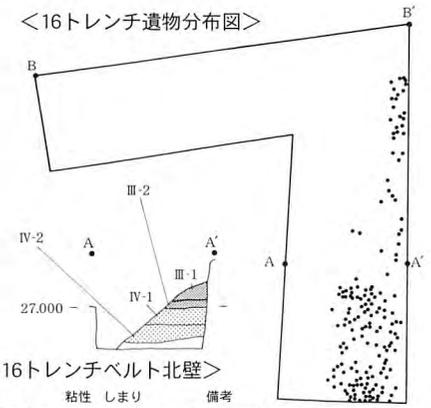
<1970年の整備時の修復土を剥がした状態>

<16トレンチ北壁>



色調	粘性	しまり	備考
I 7.5YR3/4 暗褐色土	なし	なし	
II 5YR4/8 赤褐色土	ややあり	なし	
IV-1 10YR4/6 褐色土	あり	やや強	
-2 7.5YR4/4 褐色土	あり	強	

<16トレンチ遺物分布図>



<16トレンチベルト北壁>

色調	粘性	しまり	備考
III-1 7.5YR5/8 明褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-2 10YR4/6 褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
IV-1 7.5YR5/8 明褐色土	あり	強	土器片・炭化物を多量に含む
-2 5YR4/8 明赤褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む

第5図 トレンチセクション図-3・平面図

17トレンチ（第6図）

隼人塚古墳の範囲と平坦部の状況を確認するために設定した。南北にのびる全長15.5m・幅0.5mのトレンチに、中央付近で東側にのびる全長3.7m・幅0.5mのトレンチと、南端で西側の斜面にのびる全長5.7m・幅0.5mのトレンチがそれぞれ付く。全面積は12.5㎡になる。

西壁において墳端は、トレンチ北端から約2.6mの地点、標高約26.2mで確認され、その後周溝が最大0.14mの標高差でのびる。周溝外側の下端は、北端から約5.7mの場所で確認されたが、その周溝外側は地山を削ったのち盛土を行って築いている。周溝が立ち上がったあとは周溝付近に盛土を行い、外側では旧表土により平坦な面が形成されている。また、北壁でも盛土により平坦面を形成していることがうかがえる。

墳丘面は、旧表土・地山を削り出したのちその上に盛土を行って築いているが、トレンチ北端より0.6mから1.4mほどの間は旧表土面により比較的緩やかな傾斜で、テラス面を形成していると考えられる。旧表土下場は、標高約26.8mから27.1mで確認でき、北に向かって傾斜が上がる。

なおトレンチ北端より8～9mの範囲で、旧表土Ⅳ－3層の上に堆積するⅡ－7層中から土器片が比較的まとまって出土した。

18トレンチ（第6図）

隼人塚古墳の範囲ならびに菖蒲塚古墳との関係を確認するために隼人塚古墳東側に設けた全長4.0m・幅0.5mのトレンチである。

墳端はトレンチ北端から約2.6mの地点、標高約26.2mのレベルである。周溝外側下端は認められなかったが、周溝外側のⅡ－7、Ⅱ－8層は傾斜のある堆積をしている。

墳丘面は地山・旧表土を削り出したのち盛土を行っているが、トレンチ北端より約0.4mから1.3mまでの範囲は旧表土による緩やかなテラスが認められる。旧表土下場は標高約26.9m～27mのレベルで確認でき、墳丘側で若干高まりを見せる。

19トレンチ（第6図）

隼人塚古墳の範囲を確認するため、北側に設けた全長7.6m・幅0.5mのトレンチである。

墳端はトレンチ南端から約0.7mの場所にあたり、標高は約26.35mである。周溝は最大0.08mの標高差でほぼ平坦にのび、トレンチ南端から約3.8mの地点に周溝外側下端が位置する。周溝外側上端は削平されていて不明であるが、南端より6.2mほどから自然傾斜となる。

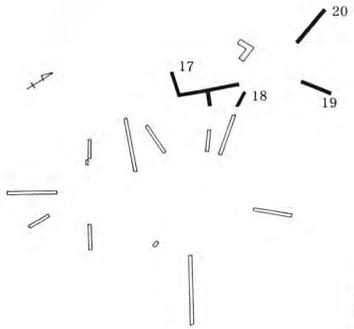
墳丘面は、明確ではないが地山の上に旧表土が認められると考えた。その場合、旧表土下場の標高は約26.8mである。

20トレンチ（第6図）

隼人塚古墳の範囲を確認するため、隼人塚古墳西側に設けた全長10.9m・幅0.5mのトレンチである。

墳端、周溝内側下端はトレンチ東端から約0.4mの地点、標高約26.2mで、その後最大0.08mの標高差で周溝底面がのびる。周溝外側下端は、トレンチ東端から約3.7mの位置にあり、周溝外側上部は地山・旧表土を削り出したのち盛土を行って築かれている。周溝が立ち上がったあと盛土や旧表土により平坦な面が形成される。また、トレンチ東端より約8mから9.2mの範囲にかけては、Ⅱ－2層から土師器片が出土している。なお墳丘裾は、地山削り出して築いている。

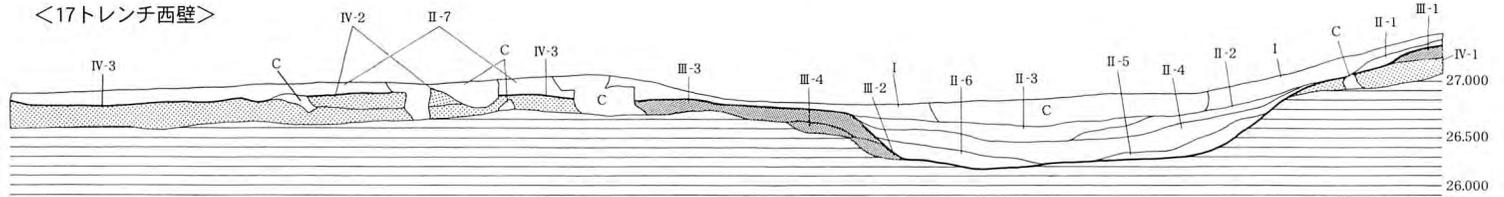
各トレンチでの調査成果に基づき、菖蒲塚古墳・隼人塚古墳の推定復元図を第7図に示した。なお第7図の周溝の内側ラインは、確認された墳裾（周溝内側下端）を、外側のラインは現状における周溝外側上端を結んだものである。



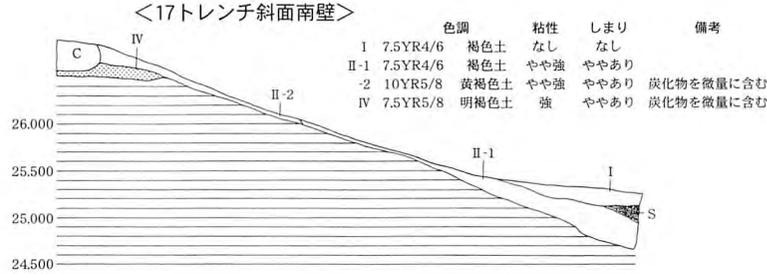
色調	粘性	しまり	備考
I 7.5YR2/3 極暗褐色土	なし	なし	
II-1 7.5YR4/4 褐色土	ややあり	やや強	
-2 10YR5/6 黄褐色土	あり	やや強	
-3 10YR5/4 にぶい黄褐色土	あり	なし	
-4 10YR4/6 褐色土	あり	やや強	
-5 7.5YR5/6 明褐色土	あり	やや強	
-6 7.5YR5/6 明褐色土	あり	やや強	
-7 10YR5/6 黄褐色土	ややあり	なし	炭化物を微量に含む

色調	粘性	しまり	備考
III-1 7.5YR5/6 明褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-2 5YR5/8 明赤褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-3 7.5YR5/6 明褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む
-4 7.5YR5/8 明褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む
IV-1 7.5YR5/8 明褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む
-2 7.5YR5/8 明褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-3 5YR4/8 明赤褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む

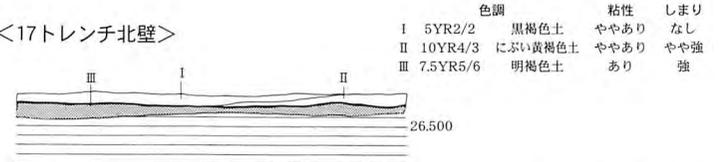
<17トレンチ西壁>



<17トレンチ斜面南壁>

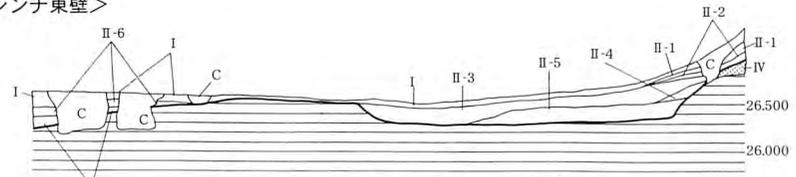


<17トレンチ北壁>

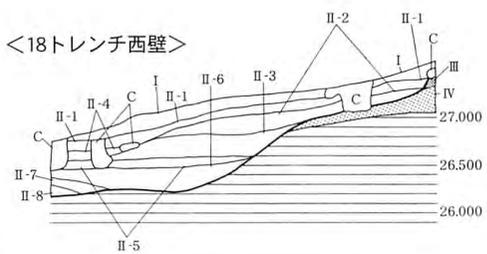


色調	粘性	しまり	備考
I 10YR3/2 黒褐色土	ややあり	なし	
II-1 10YR3/4 暗褐色土	あり	なし	
-2 10YR4/6 褐色土	ややあり	なし	
-3 7.5YR4/6 褐色土	あり	やや強	
-4 10YR5/6 黄褐色土	あり	なし	

<19トレンチ東壁>



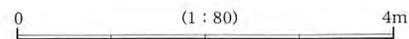
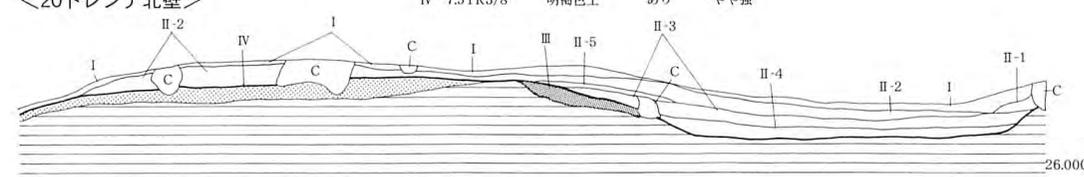
<18トレンチ西壁>



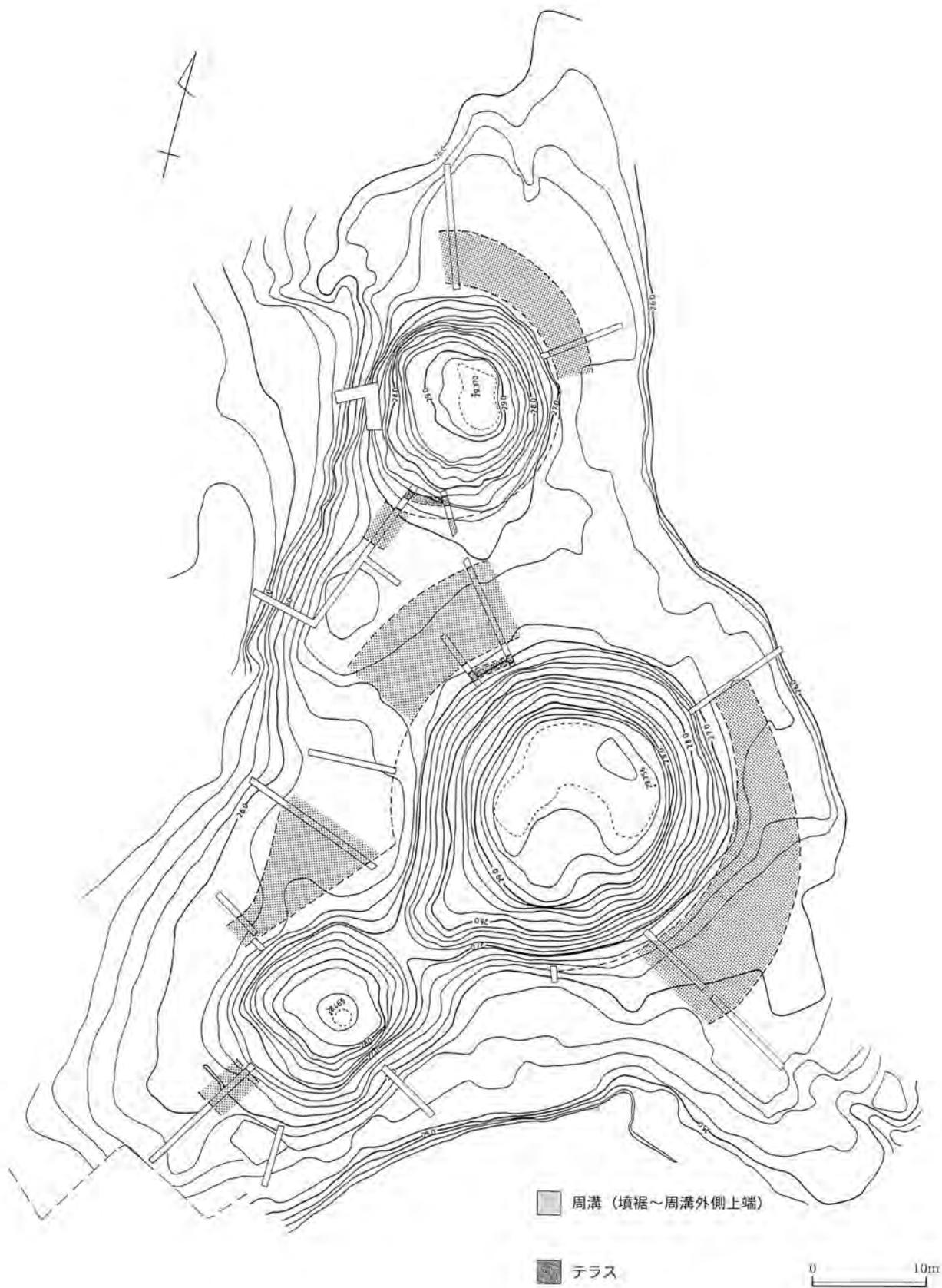
色調	粘性	しまり	備考
I 5YR3/2 暗赤褐色土	なし	なし	
II-1 7.5YR4/6 褐色土	あり	なし	
-2 7.5YR5/6 明褐色土	あり	なし	
-3 10YR4/6 褐色土	あり	やや強	
-4 10YR4/6 褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-5 10YR4/4 褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-6 10YR5/6 黄褐色土	あり	なし	炭化物を微量に含む
-7 10YR4/6 褐色土	あり	やや強	
-8 10YR5/6 黄褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む
III 7.5YR5/6 明褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
IV 10YR4/6 褐色土	あり	強	炭化物を微量に含む

色調	粘性	しまり	備考
I 5YR3/2 暗赤褐色土	なし	なし	
II-1 10YR5/8 黄褐色土	あり	やや強	炭化物を微量に含む
-2 7.5YR5/6 明褐色土	あり	なし	
-3 10YR5/6 黄褐色土	ややあり	やや強	炭化物を微量に含む
-4 10YR5/3 にぶい黄褐色土	ややあり	なし	炭化物を微量に含む
-5 5YR4/8 赤褐色土	ややあり	やや強	
III 5YR5/8 明赤褐色土	ややあり	強	
IV 7.5YR5/8 明褐色土	あり	やや強	

<20トレンチ北壁>



第6図 トレンチセクション図-4



第7図 葛蒲塚古墳・隼人塚古墳推定復元平面図

IV 遺物

1. 弥生・古墳時代

今回の調査で出土した資料とこれまで採集された資料とを分けて記述する。

(1) トレンチ出土資料

菖蒲塚古墳

6は3トレンチの盛土上に堆積するⅡ-2層からの出土で壺の底部と考えられる。底部外面に1本の削痕が認められる。内面はヘラミガキ。7は11トレンチの周溝底面上のⅡ-4層から出土した。口縁部は短く外反し、端部は丸く収まる。8・9は13トレンチ出土資料である。8は短く外反する口縁部で、端部は丸く収まる。器面磨滅のため調整不明である。9は壺で、周溝外側の地山直上付近でまとまって出土した(第5図)。径約7cmの底部から外へ内湾しながら体部下半がのびる。体部外面下半では縦位のハケメ調整が認められる。器面の磨滅が激しく不明な部分が多いが、底部外面にはヘラミガキが行われている。内面はヘラナデ。底部は円板重鎮法〔寺澤 1980〕にあたる。出土状況からは故意に破碎した可能性も推測される。また分布域からは墳丘からの崩落ではなく、西側から廃棄されたものと考えられる。

20は1トレンチの墳端から出土した凝灰岩製の砥石である。2点の破片が接合したもので、現存部での最大幅5.9cm、厚さ3.3cmを測る。平面形は、中央へ向かい幅を減じ、表裏2面と一側面に使用痕をもつ。なかでも図示の左面に顕著な使用を認め、2方向の擦痕と光沢が観察できる。近隣の山谷古墳では、後方部の一角から意図的に破碎した砥石が出土しており、本例もこれに類した資料の可能性が考慮される。

隼人塚古墳

16トレンチは破片点数にして178点と、今回の調査で最も多くの出土量をみた。その大半は旧表土中もしくは旧表土直上からの出土であり、盛土行為の行われる以前のものが多くを占める。また旧表土Ⅳ1層は約20cmの厚さの層であるが、そのうち土器の出土は上端約15cmに限られ、さらにその上端約10cmで特に濃密な分布を示す。炭化物の分布も同様で、上端約10cmの幅で土器・炭化物が水平に濃密な分布を示す状況が認められた。

①盛土中②旧表土(Ⅳ-1層)直上③旧表土(Ⅳ-1層)上端10cm中、④旧表土(Ⅳ-1層)で③の下5cm中の4つに分けた場合、図示した各土器の出土位置は口縁部に限れば、①が11・15、②が10、③が12・14・16④が13である。

10、12・13・14・16はいずれも口縁端部を丸く収めるが、13は尖り気味の形態を呈す。また、12・14は10・16に比べ口縁部は長く直線的に外反し、口縁端部の器厚は薄い。14・16の外面ではススの付着が認められる。15は東海系高坏で、口縁部は直線的にのび、端部は丸く収まる。内外面とも横位のヘラミガキで、内面の一部ではヘラケズリ痕も認められる。外面にはススの付着が認められる。17・18は甕の底部で両者とも③からの出土である。尖り気味の丸底形態である。

19は器台で、脚部外面に横位のヘラミガキが施されている。周溝外側平坦面の旧表土上に堆積するⅡ-7層から出土した。菖蒲塚古墳・隼人塚古墳のいずれに伴うものか不明である。

(2) 採集資料

菖蒲塚古墳

3～5は調査前の現地確認の際に採集されたものである。採集場所は、3が後円部の東側の平坦部で、4が後円部東側の斜面、5が括れ部墳頂である。また細片のため図化はできなかつたものの、17トレンチの西側平坦部から急斜面にかけてと、前方部南の平坦部において比較的多く採集できる。

3は細口の直口壺の口縁部と推測する。内外面には丁寧なヘラミガキと赤色塗彩が認められる。4は八字状に広がる高杯の脚部である。5は径約5.4cmの平底で、甕の底部かと推測される。円板すえおき法〔寺澤1980〕により成形されている。体部は比較的急な角度で内湾気味にのびる。底部外面にはヘラ状削痕が3本確認できる。器面の摩滅が激しく調整は不明。

隼人塚古墳

1・2は整備前に隼人塚古墳の西側崩落面から採集された資料で、厚さ10cm前後の炭化物混入粘土中に包含されていたとされる。1は頸部で屈曲したのち短い口縁部が外反する「く」字状口縁甕で、口縁端部は尖り気味に丸く収まる。口縁部外面にはススが付着する。頸部内面で赤彩がわずかに確認できる。器壁は比較的薄い。2は小型壺の体部と考えられる。外面はハケメのちヘラミガキ、内面はヘラミガキが認められる。内外面のヘラミガキは丁寧である。外面の一部で赤彩が認められる。

(3) 所属時期と胎土

採集資料の3や5はその形態から弥生時代後期、終末期に属す可能性が考えられるが、今回の調査ではその時期と判断される資料は認められなかった。

遺物からは菖蒲塚古墳・隼人塚古墳ともに細かな年代観を提示するには至らないが、全体的に面をもつ口縁端部の甕が認められない点や甕の口縁部の屈曲・外反が比較的弱い点などからは、従来言われているように古墳時代前期に収まるとすれば、その中でも新しい傾向を持つ可能性を指摘できる。

また16トレンチの旧表土中の③から出土した10・12・14・16と④から出土した13とを比較すると、細かな年代は不明であるが、時期が大きく異なる様相は認められない。

胎土は長石・石英・凝灰岩を主要鉱物とし、雲母は3に限り認められた。全体的に南赤坂遺跡で見られた土器の胎土に類似し、多くは近辺の土を利用して製作されたものと推測する。なお一部、南赤坂遺跡で指摘された「黒曜石状岩石」〔巻町教育委員会 2002〕に類するものを含有する土器が確認でき、留意される。

2. 縄文時代

17トレンチの南端から3個体分の縄文土器片が出土した。このほか縄文時代の可能性をもつ遺物としては、上記土器片出土地に近い急斜面から採集した磨石・敲石類1点と、6トレンチ西端付近出土の珪質流紋岩製剥片1点がすべてである。このうち前2者を図示した。

縄文土器はいずれも胎土に植物繊維を含み、21・22には石英・長石粒子の多量の含有も認める。21は口縁部とみられる資料で、端部内側が面的に削られる。細片のため施文構成は不明であるが、いずれも単節斜行縄文が施される。以上は前期前葉の特徴を備えており、角田山麓における該期の資料としては、台地高城部からの初例となるものである。

24は玄武岩を石材とする。最大長9.8cm・重さ318gを測り、表裏に磨耗と不規則な敲打痕、一側面に平滑な敲打痕をもつ。縄文時代のいわゆる「凹石」とは平坦面敲打の在り方に異なりがあるため年代的に下降する可能性もあり、所属時期の判断は一先ず保留しておく。

3. 古代

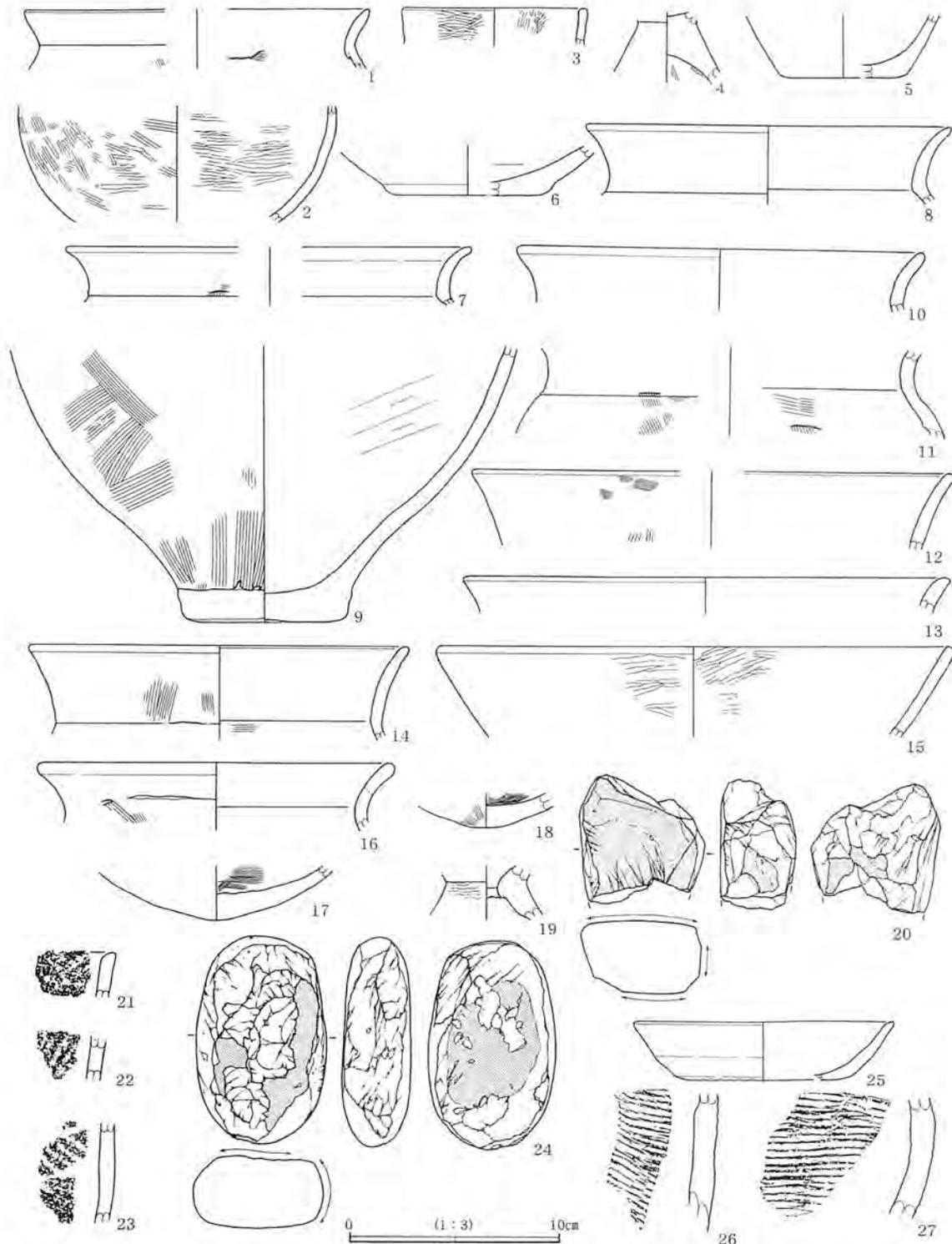
25はロクロ成形の土師器無台塚で、13トレンチの周溝内の2次堆積層中から出土した。底部切り離し後口縁部下部～底部にかけて回転ヘラケズリ調整で整えている。復元口径は約12.2cm、器高は約2.8cmである。形態や法量からは9世紀後半頃の時期が考えられる。

4. 中世

26・27はいわゆる珠洲焼の破片である。26は13トレンチの周溝内2次堆積層中からの出土で、外面には平行叩き目、内面には明瞭な丸いくぼみと一部ケズリ痕が認められる。27は後円部西側の平坦部採集資料で、

外面には平行叩き目、内面にはナデとゆるやかなくぼみが観察される。

現在国の重要文化財として金仙寺が所蔵する1170年銘・1530年銘が記された経筒や鏡、青白磁製の小壺・台子、珠洲焼の壺などの資料は、菖蒲塚古墳の後円部墳頂から出たとされ、中世に菖蒲塚古墳が経塚として利用されていたことが知られている。今回出土した資料は破片のためいずれも時期比定は困難であるが、経塚の営まれた時期の資料であるだけにその関連性が注目される。



第8図 遺物 (網点：磨耗部位、矢印：20は磨耗・24は敲打範囲)

V 調査成果

1. 墳丘の復元

菖蒲塚古墳は、等高線の形状や1970年の整備以前に括れ部が通路として利用されていた経緯などもあり、円墳あるいは造出付円墳と方墳が隣接する可能性を、また隼人塚古墳は南側に比較的広い平坦面を有することから、前方後円墳の前方部あるいは造出付円墳の造出部が削平された可能性をそれぞれ視野に入れて調査を進めた。結果、菖蒲塚古墳は墳丘内部まで調査をしていないため確定はできないものの、周溝の存在や推定される形状などからは従来通り前方後円墳の可能性が高いものと判断される。また隼人塚古墳は、造出が付く可能性が無いわけではないが、現時点では円墳である可能性が高い。

(1) 規模

菖蒲塚古墳 前方部隅をはじめ不明な箇所がいくつかあるが、古墳の規模をおおむね把握することができた。1・6～11・13・14トレンチにおいてマウンドの裾を確認できた。マウンドの裾で計測すると、長軸53～54mで、後円部径は約30mとなる。また1・6～10・13・14トレンチでは、マウンドの裾から外側に向かって比較的平坦な面がのびたあと傾斜を持つ周溝の存在が判明した。周溝外側の傾斜の上端は後世の削平により当時の高さは不明であるが、現状での周溝外側上端で計測すれば、長軸で60mとなる。

隼人塚古墳 17～20トレンチにおいてマウンドの裾を確認できた。マウンドの裾で計測すると径21mとなる。また17・19・20トレンチでは、菖蒲塚古墳と類似した形状の周溝が巡ることを確認できた。現状での周溝外側上端で計測すれば径27～28mとなる。また、推定ラインからは本来の墳丘面が西側崩落面より大きく外に出ることがうかがえ、その崩落の原因や時期も注目される。なお、西側崩落面と台地平坦部の西側急斜面とは南北にほぼ直線的な位置関係にあり、両者の関連性も推測される。これらの形成原因として断層などの可能性も視野に入れる必要がある（高浜信幸氏のご教示による）。

(2) 周溝の形

菖蒲塚古墳 墳丘とほぼ相似形を呈すると考えられるが、後円部から括れ部までの東西方向では広く、前方部側と後円部の北側では狭いといった特徴をもつ（第7図及び表1）。前方部の東西や後円部の北側は崖面により平坦面の範囲が狭く、周溝形状が当時の地形的な制約を反映していたと考えられる。また12トレンチの説明で述べたように、括れ部の西側では周溝が張り出す形状となる可能性がある。

隼人塚古墳 周溝は円形に巡ると考えられ、正円であるとすれば菖蒲塚古墳の周溝と切り合いを持つことが推測されるが、隼人塚古墳の周溝がそれを避けるように歪んだ形状を呈する可能性もある。

なお、両古墳の周溝覆土からは湛水の形跡は認められなかった。

(3) テラスと外部施設

菖蒲塚古墳 10・11トレンチでテラスを確認できた。旧表土を掘削し、地山でテラス面を造り出した後に墳丘の盛土をしており、旧表土下端部がテラス内縁を成している。幅は0.6m～0.9mと比較的狭い。これがどこまで巡るのかは不明である。

また8トレンチでは周溝内の地山が東壁に比べ西壁の方が高いレベルで確認できることなどから、簡単な陸橋を有する可能性が推測される。また同トレンチでは、周溝内に中央で途切れる溝状遺構が確認されており、これが周溝の途切れと関連する可能性が考えられる。

隼人塚古墳 7・18トレンチでは、幅0.8mから0.9mのテラス面を確認できたが、他のトレンチでは不明である。テラス面は旧表土を削り盛土を行うことで造り出しており、盛土下端がテラスの内縁を成す。なお両古墳とも葺石や埴輪などは確認されなかった。

(4) 当時の地形と盛土構造

各トレンチで確認された旧表土下場の標高を見てみると（表3）、南側よりも北側の方が高いレベルで確認できる。ちなみに1トレンチと16トレンチでは、16トレンチの方が約1m高く、当時の地形が北側に向かって緩やかに高まっていたことが分かる。

また菖蒲塚古墳・隼人塚古墳の築造は、ともに旧表土・地山を削り出したのちその上に盛土をして築造されているが、旧表土が比較的低いレベルで確認できることから、旧地形をあまり成形することなく墳丘の多くを盛土行為で形成したことがうかがえる。逆に山谷古墳では墳丘の多くが地山削り出しで、盛土は古墳上段にはほぼ限られている。このような両者の違いは、菖蒲塚古墳が比較的平坦な台地上に築造されたのに対し、山谷古墳が傾斜のある山地上といった両者の築造場所の地形による要因が大きかったものと推測される。また16トレンチでは、地山による盛土と盛土の間に一部旧表土を挟んで盛っている状況を観察できた（写真PL.3）。旧表土の盛土利用といった側面以外に、版築面を強化する意図があったものとして注目される。

墳丘盛土量については、上記の調査成果を基に墳丘で確認される旧表土上端から現在の墳頂までを盛土と仮定すれば、試算では菖蒲塚古墳の盛土量が約1400m³、隼人塚古墳が約400m³である。それに対し周溝から得られる土量は、墳丘側で確認できる旧表土上端レベルを掘り込み面と仮定して、菖蒲塚古墳が約900m³、隼人塚古墳が約300m³である。部分的な調査であり不明な点が多いことに加え、1970年の整備時に盛土が行われているため実際より墳丘盛土量が大きく算出される可能性のある点や、盛土の固定のための体積の縮小を考慮しておらず実際の盛土量より少なく算出される可能性のある点などあくまで推算にとどまるが、菖蒲塚古墳の周溝から得られる土量が盛土の土量を下回ることが推測される。菖蒲塚古墳の築造に際しては、周溝以外に周りの平坦面や墳丘を削り出す際の土も最大限に利用したものと考えられる。

トレンチ	周溝幅 (m)	トレンチ	周溝幅 (m)
1	4.0	12	
2		13	8.9
3		14	2.0
5		16	
6	8.8	17	3.1
8	2.4	18	
10	6.3	19	3.1
11		20	3.3

表1. 周溝幅（墳丘裾から周溝外側下端まで）

菖蒲塚古墳（後円部墳頂：29.974、前方部墳頂：28.476）

トレンチ	比高 (m) (後円部墳頂比)	トレンチ	比高 (m) (後円部墳頂比)
1	4.2	13	4.2
2		14	4.1
3		隼人塚古墳（墳頂：29.582）	
5	(4.6)	トレンチ	比高 (m)
6	4.3	16	
8	3.7	17	3.4
10	3.8	18	3.4
11	3.8	19	3.2
12		20	3.4

表2. 墳丘裾から現状での墳頂部までの比高

トレンチ	標高 (m)	トレンチ	標高 (m)
1	25.8	12	
2		13	26.0
3		14	25.9
5		16	26.8
6	26.0	17	26.8~27.1
8	27.0	18	26.9~27.0
10	26.9	19	26.8
11	26.9	20	

表3. 墳丘における旧表土下場の標高

2. 古墳造営前後の土地利用

第8図3・5からは弥生時代後期・終末期の年代が推定され、菖蒲塚古墳造営以前に高地性集落が存在する可能性も想定していたが、今回の調査では確実に弥生時代と判断される遺物や遺構などは確認できなかった。

16トレンチでは旧表土（IV-1層）の直上ならびにその上端10cm程の幅で特に多くの土器片と炭化物が水平に分布する状況が観察された。土器は全て細片で、炭化物も大半が粒状であったが、中には10cm程の大きなものも確認できた（写真PL.3）。この分布がどの範囲まで及ぶのかは不明であるが、17・18トレンチで確認できないことから隼人塚古墳の墳丘の比較的内部に限られる可能性が高い。また土器分布の高低幅は、濃淡を別にすれば約15cmと大きく、全てが短時間の廃棄によるものとは考えにくい。15cmの堆積にどの程度の期間を要するのかは不明であるが、人為的な要因が関与した場合その堆積速度は自然状態と比べ速いものと推測され、出土土器においてもその上下で年代が大きく異なる様相は認められない（IV）。

面的な状況が不明であり住居跡の包含層の可能性も残すが、以上の出土状況や分布などからは、旧表土中の全ての遺物・炭化物が該当するかはともかく、古墳築造前の儀礼〔土生田1995〕に関係した痕跡で

ある可能性が高いと考えられる。またIV-1層上端ラインは南北にほぼ水平のレベルで走っており、盛土前に旧表土面を平らに整地したことが推察される。ちなみに、この炭化物を含んだ旧表土は(4)でも触れたように盛土としても一部利用されている(写真PL.3)。なお明確な焚火の痕跡は認められなかった。

3. まとめと今後の課題

出土遺物からは細かな年代を特定できるまでには至らなかったが、従来言われているように古墳時代前期に収まるとすれば比較的新しい傾向が見てとれる。また平坦部の限られた台地上に2基の古墳が築かれていることも含め両者が近接した時期に築造された可能性が推測される。なお、南北を崖で挟まれる限定された地形の中に、墳丘の多くを盛土で構成する2基の古墳を築造したその高い技術・計画性は注目される。

墳丘裾から現状の後円部墳頂までの各トレンチの高低差(表2)や後円部北側のブリッジの存在、さらに平野との位置関係などからは、菖蒲塚古墳が北側よりも南方向を特に意識して造営した古墳である可能性を推測できる。この南の方角には、南西方向に御井戸B遺跡、山谷古墳、観音山古墳が、真南には稲場塚古墳がそれぞれ位置している。いずれも菖蒲塚古墳の立地する台地上からその位置をおおむね確認でき、それらを結ぶと西に角田・弥彦山、中央に平野を有したほぼ三角形の位置関係となることは留意される。ちなみに未調査であり、墳形・時期・外部施設など異なる点も多いが、同じ前方後円墳の稲場塚古墳や円墳と推測される観音山古墳の墳長が菖蒲塚古墳の約1/2であるなど、設計におけるそれらの関連性を見出すことも可能である。また、尾根先端部の標高26mの台地上に位置するため、平野から仰ぎ見るのに適した場所でもある。以上のことは、菖蒲塚古墳の築造場所をこの台地上に選んだ要因のひとつと考えられる。

一方13トレンチの壺の出土状況からは、周溝の西側から廃棄したことを推測させる。北西の台地上には広い平坦面が存在し、ここが墳丘外祭祀の空間として利用された可能性も想定される。また台地の西側は尾根がのびる方角にもあたる。尾根上の北西約140mには越王遺跡が、同約600mには南赤坂遺跡が位置することなどからは、平野と古墳の位置する台地とは主として西方の尾根筋を利用して往来したとも考えられる。なお、両遺跡が出土資料や立地の上で通常集落遺跡と様相を異にすることなどからは、菖蒲塚古墳の築造に当地が選ばれた要因の一つとして、空間としての特殊性も考慮する必要があるのかもしれない。

今回の調査では、弥生時代の利用の有無や、菖蒲塚古墳の前方部隅の形状、ブリッジの面的把握とその範囲、隼人塚古墳と菖蒲塚古墳との関係など不明な点を多く残した。今後これらを明らかにすると同時に、他の遺跡や古墳との比較を行うことで、新たな知見が得られることであろう。

— 参考文献 —

- 甘粕 健 1986 「古墳文化の形成」『新潟県史 通史編1 原始・古代』新潟県
甘粕 健・広井 造 1993 「弥彦村稲場塚古墳」『新潟県考古学第5回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
荒木勇次 1986 「11号墳出土の玉類について」『保内三王山古墳群』三条市教育委員会
上原甲子郎 1961 『巻町双書第3集 菖蒲塚古墳』巻町役場
川村浩司 1993 「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会
桑原正史 1987 「菖蒲塚の盗掘と発掘—先行諸研究による再確認と問題点—」『巻町史研究』Ⅲ 巻町
斎藤秀平 1930 「菖蒲塚古墳及経塚」『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯 新潟県
寺澤 薫 1980 「出土遺物」『六条山遺跡』奈良県教育委員会
日本考古学協会新潟大会実行委員会編 1993 『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会
土生田純之 1995 「古墳構築過程における儀礼—墳丘を中心として—」『古墳文化とその伝統』(株)勉誠社
巻 町 1994 『巻町史 資料編1 考古』
巻町潟東村教育委員会 1970 『史跡菖蒲塚古墳環境整備事業報告書』
巻町教育委員会 2002 『南赤坂遺跡』

写 真 图 版



葛蒲塚古墳・隼人塚古墳完掘状況



葛蒲塚古墳完掘状況



隼人塚古墳完掘状況



1 トレンチ周溝外側断面 (西壁)



3 トレンチ断面 (南壁)



5 トレンチ断面 (南壁)



6 トレンチ墳丘側断面 (南壁)



6 トレンチ周溝外側断面 (南壁)



8トレンチ墳丘側断面 (東壁)



8トレンチ周溝外側断面 (東壁)



10トレンチ墳丘側断面 (北壁)



10トレンチ周溝外側断面 (北壁)



11トレンチ墳丘側断面 (北壁)



11トレンチ周溝外側断面 (北壁)



13トレンチ墳丘側断面 (南壁)



13トレンチ周溝外側断面 (南壁)



13トレンチ遺物出土状況 (北から)



14トレンチ墳丘側断面 (北壁)



14トレンチ周溝外側断面 (南壁)



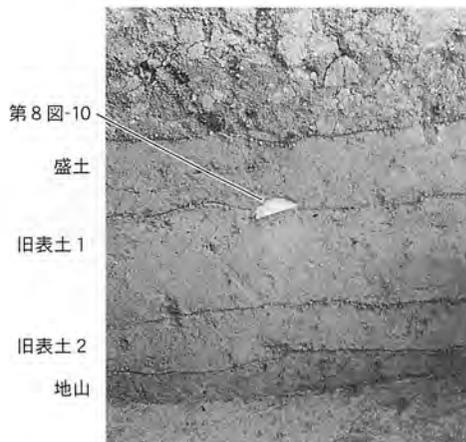
1970年の整備時の修復土を剥がした
16トレンチの状況 (北から)



16トレンチ遺物出土状況 1 (北から)



16トレンチ遺物出土状況 2 (西から)



16トレンチ遺物出土状況 3 (西から)



16トレンチ断面 (西から)



17トレンチ墳丘側断面（西壁）



17トレンチ周溝外側断面（西壁）



18トレンチ墳丘側断面（西壁）



18トレンチ周溝外側断面（西壁）



19トレンチ墳丘側断面（東壁）



19トレンチ周溝外側断面（東壁）



20トレンチ墳丘側断面（北壁）



20トレンチ周溝外側断面（北壁）

報告書抄録

ふりがな	あやめづかこふん・はやとづかこふん							
書名	菖蒲塚古墳・隼人塚古墳 —2003年確認調査の概要—							
シリーズ名								
編著者名	相田泰臣・前山精明							
編集機関	巻町教育委員会							
所在地	〒953-0041 新潟県西蒲原郡巻町大字巻甲2690-1							
	TEL 0256-72-3131							
発行年月日	2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
菖蒲塚古墳・ 隼人塚古墳	新潟県西蒲原 郡巻町大字竹 野町266-2	39	47 48	37° 45′ 59″	138° 51′ 56″	20020902～ 20021123	79㎡	史跡整備に向 けた範囲確認
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
菖蒲塚古墳・ 隼人塚古墳	古墳	古墳時代		古墳2基、周溝		古墳時代 土師器 砥石		周溝の存在 古墳の規模の判明 隼人塚古墳炭化物混入 層の水平堆積

菖蒲塚古墳・隼人塚古墳

— 2002年確認調査の概要 —

平成15年3月31日発行

発行 巻町教育委員会

〒953-0041 新潟県西蒲原郡巻町大字巻甲2690-1

TEL 0256-72-3131

印刷 北洋印刷株式会社

〒953-0054 新潟県西蒲原郡巻町漆山企業団地

TEL 0256-72-2345



写真（表） 古墳より弥彦山を望む（北東から）
写真（裏） 上空から見た古墳とその周辺

菖蒲塚古墳・隼人塚古墳 -2002年確認調査の概要- 正誤表

頁	行	正	誤
4	13	明確にすべく2002年に	明確にすべく2003年に
20	11	南南西には稲場塚古墳が	真南には稲場塚古墳が
20	(参考文献) 最下行	『南赤坂遺跡』	『南赤坂遺蹟』
26	報告書抄録中の「書名」欄	-2002年確認調査の概要-	-2003年確認調査の概要-
26	報告書抄録中の「所在地」欄	大字竹野町字菖蒲2666-2	大字竹野町266-2